

勝連城出土の元染付片について(資料紹介)

* 知念 勇

(一) はじめに

昭和52年4月から勝連城跡の史跡環境整備事業が着手された。これに伴なって、本丸西北端の城壁修復工事が実施され、崩壊した城壁の取壊し作業中の石工等によって、多くの古瓦片、青磁片が採集され村の教育委員会に届けられた。これらの資料にまじって、第1図にみるような元染付の破片があった。

本資料はこれまで報告されている勝連城出土の元染付片中、最大の破片であるばかりでなく、文様、器形が典型的な元様式を踏襲しており貴重な資料ということで、資料紹介を行なうことにした。

(二) 勝連城跡について

勝連城跡は、沖縄本島中部の東海岸に突出した与勝半島の付け根に近い、独立した標高90mの石灰岩台地上に立地する一種の山城形式の城である。

勝連城の築城が始まった年代については不明であるが、伝承によると英姫王と関連のある勝連按司系、察度の婿に当る茂知附按司系、尚泰久の婿の阿麻和利と14世紀初めより、阿麻和利滅亡の1458年まで続いたと伝えられる。

昭和40年から昭和43年にかけて、琉球政府文化財保護委員会による3回の発掘調査が実施され、第1次(注1)、第2次(注2)の報告書が刊行されている。その後文化財保護委員会は、昭和45年、日本政府の財政援助によって、約2ヶ月間におよぶ大規模な遺構調査を実施している。

(三) 矢部論文について

勝連城出土の元染(青花)について最初に注目されたのは東京国立博物館の矢部良明氏である。

昭和50年6月から7月にかけて、東京国立博物館において、開催された「日本出土の中国陶磁展」の出品物選定のため来県された矢部氏は、当博物館に収納されている勝連城出土の中国陶磁の中から染付片の一群に注目され、その大半が元様式の染付であることを指摘された。この事は、はじめての指摘であり、しかも130点余もの多くの元染付をまとあたりにした同氏は、甚く感動した様子であった。

これらの再発見ともいべき元染付について、南島考古に寄稿をお願いしたところ、心よく承諾され、同年9月発行の南島考古第6号(注3)に「日本出土の元様式青花磁器について」—沖縄・とくに勝連城の出土品を中心として—の論文が掲載された。

同氏は論文の冒頭に「14.5世紀の琉球国は、沖縄のながい歴史のなかでもっとも豊かに繁栄し、東アジアのはなやかな交渉のはれやかな交渉の舞台のうえに名をはせた栄光の時代であった」とし、

(* ちねんいさむ 県立博物館学芸員)

「勝連城本丸出土の青花磁片の大半が元様式であったことは驚目の至りであった」とその感動振りを表現している。さらに「これらの陶片は中国陶磁研究のうえから貴重な課題をふくむだけでなく、沖縄の歴史のうえにも看過することのできない極重要な資料となる…」とその重要性を解いている。

矢部氏のあげた日本における元染付の出土地は、①神奈川県鎌倉海岸、②福井市一乗谷朝倉氏遺跡、③沖縄県読谷村古墓、④沖縄県今帰仁城跡、⑤沖縄県那覇市首里城跡、⑥沖縄県勝連城跡等である。その後発見された浦添城を含めると全国的にみて沖縄県における出土例が圧倒的に多い。そのうちでも勝連城はその出土量において、他を圧倒している。

また同氏は、勝連城出土の元染付を純然たる典型的元様式なものと様式判断のむつかしい下手な青花に分けて述べている。

前者の器種は獸耳壺、広口壺、鉢、大盤などの元染付を代表する器種である。

(四) 新資料紹介

今回採集された元染付盤は、第1図、図版1に示した盤の底部から胴部にかけての破片である。

文様は、見込みに鰐・蘋・おおうき草等の配された魚藻図文で口縁部を欠失し、見込みと口縁部間を波頭文で埋めている。

畳付と内面は、露台となり、高台は大きく低く、がっしりと削だされ、内割りの削りカンナはまっ平にあてられて、鏡のような平面をつくり出す。底部から胴部にかけての文様はラマ蓮弁内に葡萄図がかきこまれている。

胎土は選良された白土で、コバルトの顔料があざやかに白地にくっきりと浮びあげている。

器厚は底部中央から畳付部にかけて、漸次厚さを増し、0.95~1.1cmで、胴部は0.6cmである。

畳付の外径が推算30cmであるので、完形の径は40cmを悠に超す大盤の典型的な元様式を備えた染付である。

本資料の出土状況は、はじめの項で述べたように、本丸西端部の城壁工事の際、石工等によって、青磁等の他の遺物とともに採集されたものであるため、出土層位については、全く不明である。

調査報告書(注1)よりみると、勝連城は、本丸西端部よりに2m余の堆積層があり、9枚の層よりなる。このうち、1・3・5・7・9の各層が文化層であり、3層と5層において、元染付が出土しているが、5層は3層からの落ち込みと考えられる程度の出土量であり、元染付を主として出土する層は3層である。

3層出土の共伴遺物には、青磁、鉄製品、陶器、土器、ガラス製玉、瓦(高麗、大天瓦)、古銭等で他の層に比して、最も多種、多様の出土品があり、勝連城における最もはなやいだ時代であったことが想像される。

(五) 三上論文について

勝連城出土の元染については、前述の矢部氏のほかに、昨年3月、三上次男博士によって、「沖縄県勝連城出土の元染付片とその歴史的性格」(注4)と題する重要な論文がある。

矢部氏は第1・2次発掘の出土品について論ぜられ、三上氏は、第4次発掘の出土品について論

じている。

三上氏があつかった資料は10片で、そのうちの7点について復原的観察を行ない詳細な説明がなされている。

図上復原の7点のうち、6点までが至正タイプといわれる精巧優美な精品の破片であることがたしかめられたとしている。

これらの器形は、皿、鉢、盤、壺などがあり、いずれも、優品で「沖縄に輸入されたもの多くが当時の高級品であったことがわかる」としている。

これに反し、青磁は14世紀には、大形で高級品が多く生産され輸出されていたにもかかわらず、沖縄においては、小・中形が圧倒的に多く、染付の出土状況とは対照的であることを指摘されている。

この相反する出土状況について、同氏は次の二つの理由を上げている。

一つは、14世紀中期の中国では至正タイプといわれる大形高級の染付に主力がそそがれ、そのころ小形の簡略な製品は輸出品として軽視されていたとする考え方、二は大形高級品と小形簡略品の両者ともに輸出されたけれども、勝連城の関係者は、とくに好んで大形の優秀品を輸入したとする見方、三は大形優秀品の生産されていた時期には、小形簡略品は生産されておらず一前後いずれかに時期がずれていたため一、従って沖縄に姿を見せないとする見解などである。

「何れにせよ、高価であったと思われる14世紀中期の染付を購入した勝連城支配者の経済的基盤の大きさについては、いまさらながら充分の考慮をはらい検討する必要がある。」を述べている。

(6) まとめ

以上最近勝連城から発見された、大形の元染付片について、これまで発表された二つの論文を参考、紹介しながら説明した。

元染付は、中国陶磁の中でも特に編年の位置づけが明確なものである。

したがって考古学的な立場でいうと、元染付に共伴して出土する他の遺物を詳細に検討することが必要であり、そのことが意義深いことであると考える。今回は時間上の制約があって、元染付の資料紹介にとどめた。当館収蔵の共伴遺物について、後日検討したいと考えている。

文献

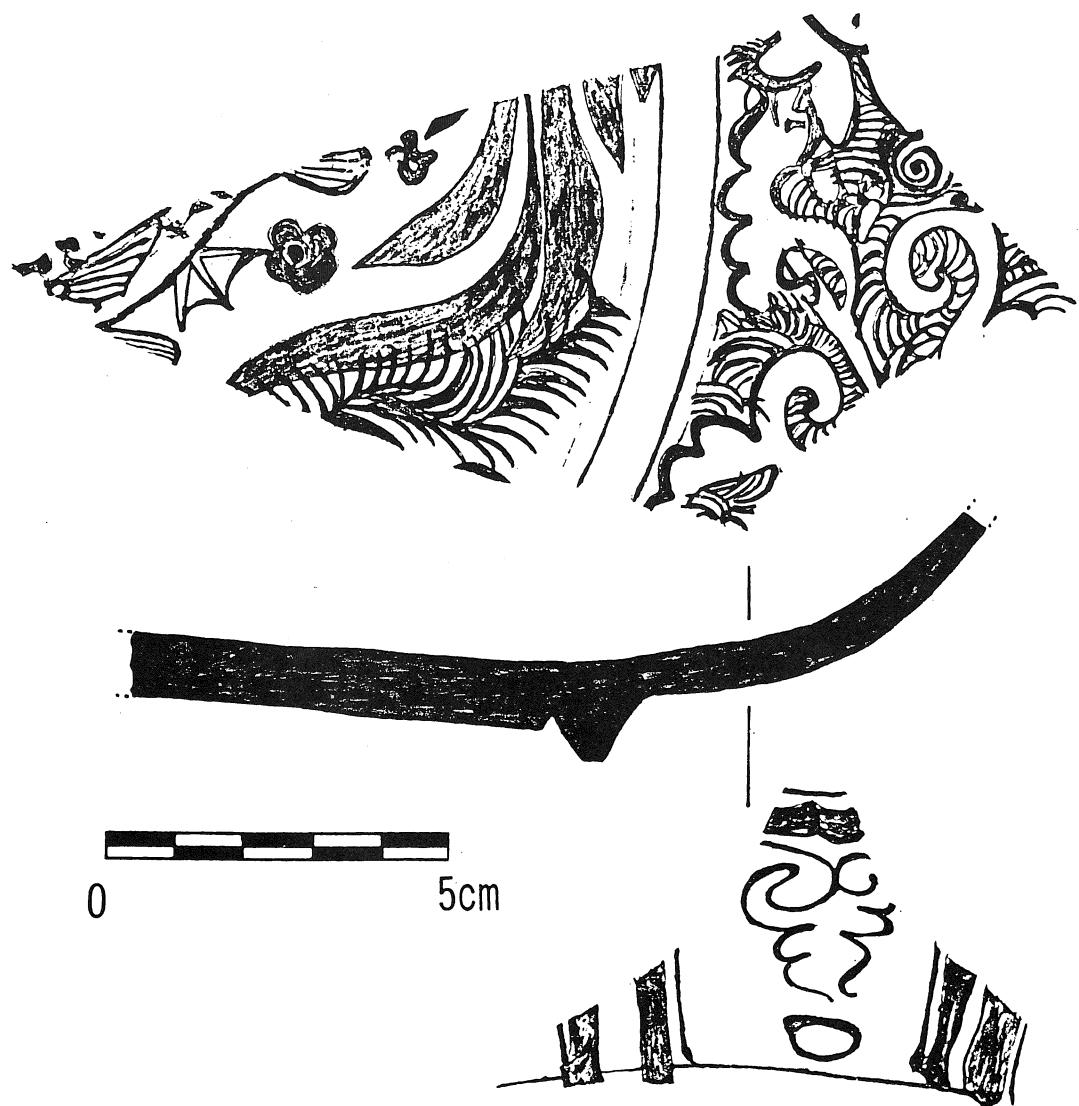
注① 勝連城跡第1次発掘調査報告書、琉球政府文化財保護委員会、1965年。

② 勝連城跡第2次発掘調査報告書、琉球政府文化財保護委員会、1966年。

③ 矢部良明「日本出土の元様式青花磁器について」—沖縄、とくに勝連城の出土品を中心にして—南島考古第4号沖縄考古学会、1975年。

④ 三上次男「沖縄勝連城跡出土の元染付とその歴史的性格」考古学雑誌第63巻第4号1979年。

第 1 図





表



裏